1995年8月10日第三種郵便可（毎週1回水曜日発行）2017年5月5日発行　増刊通関7055号　ＳＳＫＳ月刊きょうされんTOMO No.446付録

きょうされん第40回全国大会 in 北海道（9月15・16日開催）実行委員会事務局・広報局　発行　第6号

つなげよう時計台の街から

〒065-0033 札幌市東区北33条東14丁目5-1 社会福祉法人さっぽろひかり福祉会内事務局
TEL:011-743-3009 / FAX:011-731-0211

特別分科会I〈相模原障害者殺傷事件〉」に寄せて（大会1日目 15:10-17:30）

「犠牲者の尊厳回復こそ最も重視すべきである。」

大会副実行委員長（北海道大学名誉教授）上野武治氏

この特別分科会では、昨年7月の神奈川県立障害者施設における殺傷事件をとりあげるが、発言予定者としては「被害者の匿名」問題に絞って言及する。

1.　事件の本質は「大量殺りく事件」である！

元職員によるこの事件で、入所者の19名が殺され、24名が負傷した。国は加害者が事件前に大麻中毒で措置入院していたことを理由に、措置入院制度を治安強化の方向に改変しようと目論んでいる。しかし、加害者は以前から「障害者は不幸をつくる存在で、殺されるべき」と主張して解雇されており、事件も精神障害に起因するものではなく、障害者差別の思想に基づいて入所者の皆殺し（＝大量殺りく）を図ったものである。

今後、加害者の刑事責任が裁かれるが、同時に裁かれるべきはわが国社会に根深い障害者権利条約と無縁な障害者差別である。

2.　被害者の匿名は障害者の社会的抹殺である！

この事件で重大なことは被害者全員が匿名にされたことである。警察は「遺族の意向」を理由にしているが、これ自体はきわめて異例である。警察も県も、遺族にとっては「障害を持つ者は殺されても仕方がない存在で、被害者が家族の一員であることを隠したい」意向を汲んだということか。施設職員もマスコミも、被害者名の公表によって被る遺族の不利益に配慮し、匿名化に協力したということか。県も施設事業者も、「個人情報の保護」を理由に被害者や家族が特定される慰霊祭は行わず、1日も早い事件の風化を望んでいるのか。公判では、裁判所も検察も、弁護側も被害者の名前は一切伏せ、傍聴する家族も特定されないように「密室で」審理するつもりなのか。

事件の犠牲者は、生命を奪われただけでなく、公民として存在した事実すら抹殺されているが、こうした状態こそ加害者が最も望んだことではなかったか。

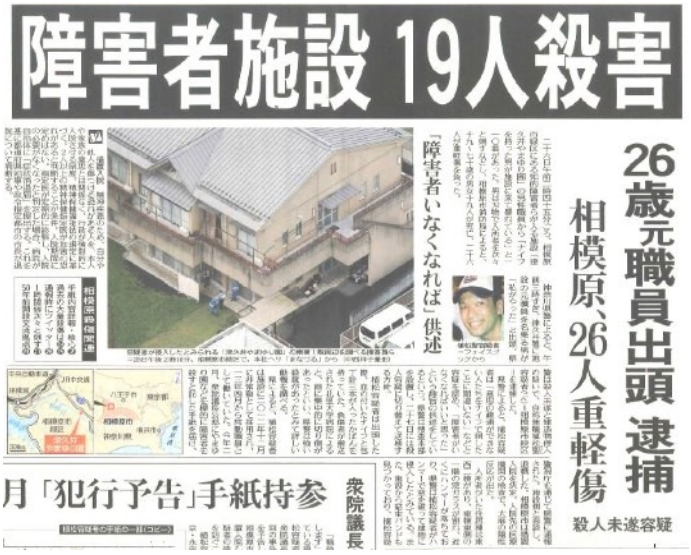
3.　事件での扱いは障害者権利条約と障害者差別解消法への重大な違反！

被害者がこうした異例の扱いをされた理由は、彼らが「障害を持つ」ためである。わが国が2014年に批准した障害者権利条約は、「障害に基づく差別」を「障害に基づくあらゆる区別、排除又は制限」と定義している（第2条）。また、2016年施行の障害者差別解消法は、「・・全ての障害者が、障害者でない者と等しく、基本的人権を享有する個人としてその尊厳が重んぜられ、」と記し、国や独立行政法人、地方自治体などの行政機関や事業者に差別解消を義務づけている（第1条）。

警察も県も行政機関ではなかったか。

4．差別との闘いは被害者の尊厳回復が前提

今回の事件で最も重視されるべきは、障害を理由に命を絶たれた上、闇に葬られている犠牲者の社会的復権であり、尊厳回復である。名前も故郷も奪われ、火葬場や墓場まで差別されたわが国ハンセン者の歴史と人間回復の闘い、ドイツでのナチにより殺された障害者の人生を取り戻す取り組みを今こそ想起すべきではないか。


障害者施設 19人殺害

26歳元職員出頭 逮捕

相模原、26人重軽傷

殺人未遂容疑

「障害者いなくなれば」供述

月「犯行予告」手紙持参

衆院議長

ボランティア募集にご協力ください

運営2局長　管野　敦

支部総会に合わせ、全国大会のボランティア養成講座を開催致しました。

養成講座には、ひかり福祉会家族会より5名、学生より8名、運営委員10名の23名が受講されました。今回の養成講座は、全国大会でどのようなお手伝いをしていただくのか概要を中心とした講座内容を行いました。きょうされん設立からの40年の歴史、今回の全国大会でボランティアの皆様にお手伝いしてほしい内容、特に移動介助や付き添い等多くのボランティアを必要とするなかまの観光と、介助のお手伝いをしていただくために３障害（身体・知的・精神）の症状や配慮してほしい事を各担当者から大変わかりやすいご説明をしていただきました。時間の都合上、持ち時間が限られた中での講座内容となりましたが、一人でも多くの方にご理解とご協力を得られるよう、現在、7月8日の2回目の養成講座を企画中です。引き続きボランティアを募集していますので、よろしくお願いいたします。

（右写真はボランティア養成講座の様子）

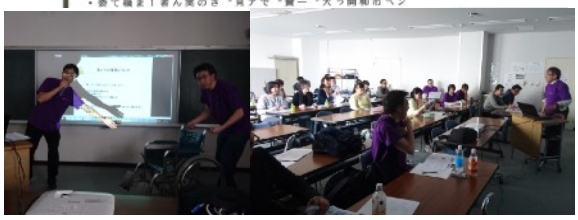
北海道新聞

障害者の共同作業所団体

札幌で初の全国大会

9月、シンポもボランティア募集

五月十六日北海道新聞朝刊に掲載されました！



全国大会専従事務局員決定！

早速インタビューさせて頂きました🌟（右文）

人に詩あり

「薬害」は風化させぬ

闘い妻との二人三脚

HIV感染と実名明かした　井上昌和さん（38）

全国大会in北海道の熱気と感動を、ともに！　全国大会実行委員会事務局員　井上　昌和

私は1986年に大学を卒業し、6月から「稚内障害者共同作業所　手づくり工房木馬館」（当時）の最初の専任職員として働き始めました。準備期間中は馬小屋を事務所として使い、6月15日から廃材を利用して建てた作業所で6人の通所者・所長（パート）とともにスタートしました。’92年4月に法人化し、’95年2月からは道内で精神障害者の初のグループホーム（4月より開始）の世話人を約2年間兼任しました。

当時私は新婚でしたが、6人の仲間とともに、住込みの世話人として楽しく生活したことが思い出されます。

私は生まれつきの血友病患者で、薬害エイズ事件の被害者です。当時、免疫力が底をつき、北大病院での治療が必要となり、大変残念でしたが退職し、‘97年4月に札幌へ転居しました。半年間の入院とその後の長い療養生活を余儀なくされましたが、徐々に回復し、薬害ヤコブ病訴訟やハンセン病国賠訴訟の支援などに参加しました。様々な方との出会いから勇気をもらい、2002年5月に薬害被害者として実名を公表しました。ハンセン病回復者の方から頂いた言葉「闘わなければ何もプラスは生み出さない。運動のないところに幸せはない」を私たち夫婦の座右の銘として講演活動などを続けています。

‘86年、22歳で初めて参加した大阪でのきょうされん全国大会では、「働くなかでたくましく」を実感する熱気と感動を鮮明に覚えています。’96年旭川での全国大会では、仲間たちと貸切バスで大挙して参加したことが思い出されます。20年のブランクがありますが、今回開催される全国大会の成功に向けて微力ながら頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

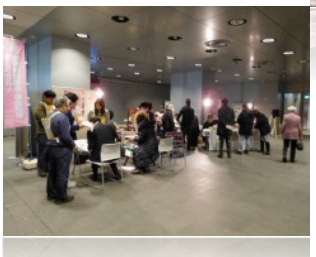
さっぽろ地下歩行空間にて（3月27日）

午前11時より午後6時まで11事業所、約100名が参加し、地下歩行空間バザー・署名・全国大会PR行動を行いました。日頃のきょうされんの活動の資料の展示、全国大会のグッズ販売、署名の呼びかけ、７事業所による授産製品販売を行いました。時間帯により板谷みきょうさんも出演してくださり、全国大会テーマソング『時計台の街から』を歌い、にぎやかに人目を引きつけていました。春休みの平日ではありましたが、ショッピングのお客様など足を止める方も多く、宣伝効果があったのではないでしょうか。開催前に道新で取り上げていただいたことも幸いし、わざわざ足を運んでくださった方も多かったようです。ありがとうございます。製品を見に立ち寄ってくださる方、署名の呼びかけに応え熱心に耳を傾け、署名してくださる方。300筆以上の署名をいただきました。すみれ会の方が中心となり行った当事者の訴えが皆さんの心に響いたことも署名へつながったのだと思います。

今回、興味を持ってくださる方が思いのほか多く、地道にPRしてゆくことの大切さを改めて感じました。またリピーターの方からの応援の言葉に普段はお目にかかることが無くても、活動や製品を通して思いが伝わり、支えて下さる方は確かにいることを実感できた一日でした。

（左写真）全国大会テーマソング「時計台の街から」を歌う様子♪

当事者からの訴えの様子（右写真）



（左写真）全国大会グッズ販売や署名活動の様子